

人権コラム7月号

人間にあって、AI にないもの

北川 知子（大阪教育大学）

AI を「チャッピー」等と名付け、親しく利用する人が増えています。こちらが意図してなくても、検索や、文書作成のためにアプリを立ち上げるだけで自動的に、装備された AI が「ご質問は?」「下書きを…」等、AI の使用は大量の電力を消費すると聞き、極力使いたくないと考えている私の気持ちなんてお構いなしにお節介が始まり、意図しないまま使われている(?) こともあります。

約 30 年、ひと世代前は、何か調べるなら辞書を何冊も引いて、出かけるなら時刻表と路線図を調べて…があたりまえでした。それらに費やしていた時間と労力を思うと、いまは便利でありがたいのですが、ふと思うのです。そのおかげで得られたはずの時間はどこへ消えたんだろう? そういえば、かつて調理や洗濯、掃除に費やしていた膨大な時間と労力も家電製品が解放してくれたはず…なのに、その時間も、いつの間にか失ってしまったようです。

はて? では、その解放され自由になった時間はどこへ…?

AI の登場で仕事が効率よく進む…と利便性が盛んに喧伝されます。効率が良い、つまり短時間ででき、自由な時間と余裕が生まれる…はず。さて、その時間は、ちゃんと私たちに残り、余裕をもたらすのでしょうか。それとも、今までと同じように、得られたはずの自由な時間を、私たちはまたも見失うのでしょうか。見失わないために、何が必要なのでしょう。

そんなことを考えていたら、AI はミヒヤエル・エンデの『モモ』という物語に登場する「灰色の時間泥棒」のように、私には思えてきました。

ちなみに、「人間にあって AI にないものは“ためらい”」だそうです。

躊躇、迷い、逡巡、曖昧さ。決断しきれない、後ろ髪引かれる思い、ぬぐい切れない心配や不安、自信のなさ…そういった感情は AI にはありません。だから AI は迷いなく、より良い策を早く選ぶために役立つのかもしれない。でも、その「より良い策」に、ごくわずかでも誰かを傷つけ、切り棄てる可能性があると感じて「ためらい」が生じるとき、私はその「ためらい」を手放さないのも人間の矜持ではないかと思うのです。「ためらい」は、効率を損なうかもしれませんが、効率、効率と追い立てられることが、得られたはずの時間を見失わせるのだとしたら? 私たちの求める効率・利便性とは何なのか…。私は、『モモ』を読み返して、もう少し考えてみようと思います。